

若手整形外科医×エキスパート

積極的に聞く、出し惜しみせず教える、整形外科はこう進む！

土屋弘行¹⁾ 山本憲男²⁾ 浅野陽平³⁾ 藤田健太郎⁴⁾



「今、何が知りたいのか」 アンケートからのスタート

——今回本誌増大号では土屋弘行先生・山本憲男先生に特集「できる整形外科医になる！—臨床力UP、整形外科診療のコツとエッセンス」をご企画いただきました。企画の狙いについて、教えてください。

土屋 今回の企画の特長は、まずわれわれの関連病院の若い先生たちに「今、何が知りたいのか」というアンケート調査を行い疑問を掘り出して、そこから項目を考えたところですよ。それがちょっとミソですね。

教科書や論文を読んでも、「こういうことを知

りたい」が100%手に入るわけではないですよ、もっとも今は専門医プログラムがありますから、皆さん、専攻医として非常に教育的な研修期間を送ることができますが、では自分たちが若かった時には、どうやったんだろうかと……。これがぜんぜんアカンかったんですよ(笑)。特に外科系は「みて覚えろ」でしたからね、そうではなく、若手の疑問を掘り出して、それに答えるような企画ができればいいと考えたのです。

若手が知りたいことを出してくれたら、それに答えるかたちで執筆者の先生方は、そこにご自身の思いも必ず入れます。通常の論文とはまったく違うタイプの読み物になっているのではないかと

¹⁾ 横浜栄共済病院/金沢大学(写真前列左)

²⁾ 金沢大学大学院先進運動器医療創成講座(同前列右)

³⁾ 金沢大学附属病院整形外科(同後列右)

⁴⁾ 富山県済生会富山病院整形外科(同後列左)



土屋弘行 氏

横浜栄共済病院・病院長

金沢大学名誉教授

1988年 金沢大学医学系研究科大学院卒業。

1989年11月 金沢大学医学部助手。1991年5月～1992年4月 ウィーン大学整形外科教室および生理学教室留学。

1991年7月 金沢大学医学部講師。1999年7月 金沢大学医学部助教授。2006年4月 金沢大学医学部附属病院整形外科長/病院臨床教授。2010年4月 金沢大学大学院医学系研究科整形外科講座教授。2023年4月 金沢大学名誉教授。

「医師は働く限り勉強し続けなければなりません。少しでも進歩していきたいと思います」

思います。

山本 今まで私も論文や雑誌の編集・執筆に携わらせていただいたことがありますが、どちらかというと高名な先生が、若手はここに興味がありそうと推し測り、それを「教えてあげる」という、一方通行になりがちであると感じていました。また単なるハウツー本では、なぜそうするのか、なぜそれを選ぶのかといった理由のところはまったくわからず、なかなか身につかない。書き手と読み手の間に双方向性があるって、知りたいことは簡単に学びながら、同時に自分の力を伸ばせる構成と文章量にしたら興味をもっていただけるのではないかって、今、何が知りたいのか、アンケートのメールを送りました。

土屋 そしてわれわれはもうかなり経験を積んできているけれども、われわれの側にも「こうしておけばよかったな」「これがあつたから今こうしてい

る」というものが絶対にあるわけです。それを「コラム」「スペシャリストからのメッセージ」が補うかたちですね。

山本 メッセージ性を含んだ、ある意味気持ちのこもった特集もよいのではないかって思ってこの企画に携わりました。

知りたいこと、そしてどう答えにたどりついているか

——今回の座談会には若手の先生2名にもご参加いただいています。

山本 浅野陽平先生は研修を終えて大学病院に戻って来て、大学院生として臨床と研究に邁進しているところです。もうすぐ学位論文も終わり、独り立ちして、これから後輩を教えていく立場になる過渡期にある先生です。

藤田健太郎先生は医師4年目で専攻医2年目、後期研修でいろいろな病院を回っています。これから整形外科を自分の中で積み上げていくような立場で、そしてやる気もある——前途洋々な2人です。

——どのように整形外科医を志されましたか。

藤田 私は市中病院で初期研修をしました。市中病院の整形外科は外傷の診療機会が多いと思いますが、整形外科をローテーションした時に外傷の手術に入る機会が多く、興味をもちました。外傷の手術をみたい、自分でもやりたい、と思ったのがきっかけで整形外科を志しました。

浅野 もともとサッカーをやっていて、医師の道に進むにあたってスポーツに携わりたい思いがありました。臨床研修が始まり金沢大学附属病院の整形外科を実習で回らせていただいた時に「なんてカッコいいんだ!」と。「私は整形外科に入ります」と比較的早くに土屋教授にお伝えし、医学生の時から頑張って、無事に整形外科医になれたという経緯です。

——知りたいことは変わってきましたか。

藤田 私はまだ専攻医2年目なので、スタートした時と現在とで知りたいことはほぼ一緒です。外傷の手術療法や保存療法を含めた治療法を具体的に知りたいなと思っています。コロナ禍というこ

ともあってオンラインのセミナーが多く開催されて、現地に行かずとも骨折治療などの情報を仕入れたり、雑誌も非常に多いので当直の時には携えて読み込んだりしています。

外傷はひと通り経験し、今は人工関節などにも興味が湧いてきている状況で、そういったところも少しずつ勉強していけたらなあと思っています。
浅野 整形外科医としてサッカーに携われないかということが入口ではあったのですが、初期研修が終わり専攻医として比較的大規模な病院をローテートしたので、いろいろな疾患について専門の先生方に教えることができました。スポーツのほかにも興味が湧いて、知りたいことが出てきました。けれども、知りたいと思った時にその都度聞けるわけでもないの、胸に秘めていたこともありますね。

1年、2年と年を重ねると、外傷や変性疾患については何となく対応できるようになったのですが、外病院で一番焦ったというか、自分に力がないなと思ったのは、整形外科の外来に骨転移の相談が来た時です。ローテートしていた時には骨転移は経験する機会がほとんどない分野だったので、知りたいと思いました。

山本 日本整形外科学会の会員約25,000人のうち、腫瘍の専門医/認定医は0.76%と、1%いないのです。骨軟部腫瘍をある程度自信をもって扱える整形外科は圧倒的に少ない。2人に1人ががんになって、3人に1人は亡くなる今の世の中で、骨転移を、運動器を専門とする整形外科医がもっと積極的に自信をもって診ていくことが必要だと。たぶん、そう認識してくれたのでしょね。

「次、どうするんや？」

——「こんなことをもっと知ってほしい」と、若い先生に対して思われることはありますか。

土屋 整形外科は手術がメインです。手術をしていると「もっと勉強してこいよな」と。これは皆が感じると思います。チーム医療なので、事前に皆で話し合いをしてやればもっと勉強になりますが、忙しい。皆、突然集まってきて「さあ、やるぞ」と



山本憲男 氏

金沢大学大学院先進運動器医療創成講座・特任教授

2000年 金沢大学医学系研究科大学院卒業。

2001～2003年 アメリカ合衆国カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)外科学教室客員研究員。2010年 金沢大学大学院地域医療救急・整形外科学講座特任教授。2014年より現職。腫瘍・膝・骨代謝グループチーフ。

「医療においては、患者さん、医療スタッフ、研修医、指導医など、皆へのrespect(敬意)を忘れないことが大切です。常識に流されず、常に疑問と興味を持って、いつまでも学んでいきたいと思っています」

手術をして、手術中に若い医師は怒られる。われわれの時は手術中に変な質問をしてくる先輩もたくさんいましたね。「次、どうするんや？」とかね。手が邪魔だったらバチッとたたかれたり。

——ええっ！そんなご経験は？

藤田 ないです。

山本 あったら大変です。

浅野 幸いわれわれは、やさしくご指導いただけます。ですが時折、手術中に解剖学やなぜここでこうするのかのテクニックについての質問を、上級医の先生にいただきます。うまく答えられないとその場でやさしく教えてくださる先生も、反対に「次回までの宿題や！」と、その場では回答を伏せる先生もいらっしゃいます。そうした場合は次の手術までに自分で勉強します。もちろん、ある程度の予習をして手術に臨みますが、それ以上の鋭い質問があったりします。



浅野陽平 氏

金沢大学附属病院整形外科

2015年4月 金沢大学附属病院で初期研修。2017年4月 金沢大学整形外科へ入局。専攻医として関連病院で2年半の研修。2019年10月 金沢大学整形外科腫瘍・膝・骨代謝班へ大学院生として帰学。以後、現在まで骨軟部腫瘍領域と膝関節領域を中心に診療を行っている。

「日々勉強で診療と研究に精進したいと思います」

土屋 解剖と術式だな、手術は。

“伝承”が大事なことも

土屋 今はギプスを巻ける人はほとんどいなくなっただんじゃないかと思っていますね。

藤田 ギプスは外来で迷うことが非常に多いです。巻き方は何となくわかります。動画もみますが、ギプスで大事になってくる力加減・きつさ、その辺りは直接そばでみて覚えないとわからないところがあると思っています。ギプスは、外来に出たら「お前、やっつけ」みたいな感じですが、うまい人の実技を直接みたことがないというのがあります。

山本 その場じゃないと、伝わらないのかな。

土屋 こういうのは、伝承がものすごく大事ですね。ギプスの巻き方も、われわれがみせて習っていくといいと思うのですが、今はそういうことがあまりないんじゃないかな。大学病院では、ギプスを巻くことはほとんどないものね。

藤田 本もあまりないですし。

土屋 ありますよ、すごいのが。

(注；Brown SA. Orthopaedic Immobilization Techniques, Sports Publishing LLC; UK, 2014)

一同 (書棚から取り出された書籍に注目)

——先生方で、ざっくばらんに話をして、「あれ、いいよ」とか「これ、みたら？」とか、そういう時間は普段ありますか。

藤田 外来の合間に、「この本、みてきたらいいんじゃない？」とかけっこうあります。

山本 「この本はいいから買いなさい」とか、昔はもうちょっと命令的なこともありました(笑)。

特集のここが読みたい

藤田 私は特集を企画するための事前アンケート(君たち、今何が知りたいのか)で牽引を挙げました。

土屋 そういうのはギプスと一緒に、なかなか教科書に載っていませんね。

藤田 採用していただいて、ありがとうございます。

浅野 私は、どちらかというとテクニカルなところよりも、当たり前に使っているけれども、「なんで？」といわれると答えられない、探してもなかなか明確な文献などがみつからないような領域に、個人的に興味をもってみさせていただきました。

テクニックやいわゆる各論的な治療に関しては、文献や教科書的なもので学ぶことができます。けれどもベーシックなところ、外来で自分が当たり前に行っているようなこと、例えば今回の特集で取り上げられている被覆材1つとっても、「なぜこれか？」と聞かれて、自信をもって回答するのは難しいです。そこを細かく丁寧に説明してあるものは見つけづらいし、見つからないこともあるので、明確に説明していただけるのがありがたいと思います。

臨床的实力は1つひとつの積み重ね

——本誌刊行は5月を予定しています。整形外科にはじめて足を踏み入れる方、新しい研修先で働いている方、いろいろな読者がいらっしゃいます。

山本 臨床というのは1つずつの積み重ねですね。若い頃は先輩がやる手術を手伝って、「自分がこのネジを入れました」とちょっと自慢し合うこともあります。けれども医師1年目に10年目、20年目と同等のことはできないので、段階を経るごとにテーマをもって、これから40年、50年…と続く長いキャリアにおいて1つずつ知識や技術を積み上げていってもらいたいと思います。

土屋 いろいろな知識や技術・経験の1つひとつの積み重ねが、最後はとてつもなくハイレベルなところへいくわけですね。イチローが、「1つひとつの小さいことの積み重ねがとんでもない記録になる」と言っています。彼はホームランバッターでなく、ヒットを打ち続けたわけだけでも、ヒット1本1本の積み重ねがとんでもない記録に……。われわれもそうで、年を重ねるごとに経験を積んで、知識を得て、技術も学んで、医師としてのレベル/医療のレベルが高いところへ上っていくわけです。

研修で大切なこと ——咀嚼する、相手を想像する

山本 研修中は複数の病院を回る先生も多いと思います。研修先により少しずつ方針が違います。時々、次の研修先ではそれまで自分が習ってきた手術テクニックや治療方針と異なることがありますが、「僕は、そんなのは……」と受け入れられない人もいます。各先生、ご経験の中でそれぞれの積み上げがあって話をされています。最初から「そんなのは」と否定するのではなく、まずは自分で1回取り入れて咀嚼してみる。そのうえで研修後どうするかは自分で判断する。せつかくの機会ですから、ぜひいろいろな病院でいろいろな知識を習っていただきたいです。

藤田 外病院を回ると各病院で特色があるので、よいところを吸収して今後の整形外科医人生につ



藤田健太郎 氏

富山県済生会富山病院整形外科

2019年 富山大学医学部医学科卒業。

2019年4月 石川県立中央病院初期臨床研修医。2021年4月 金沢大学附属病院整形外科。2021年10月 国立病院機構金沢医療センター整形外科。2022年10月 富山県済生会富山病院整形外科。

「これからの整形外科の発展のために全力を尽くす所存です」

なげようと、まさに考えていたところでした。

浅野 いろいろな病院を回ることができるのが専攻医や私のような若手のメリットだと思います。その場その場のやり方、条件、先生の考え方があって、手術でいったら、滅菌ドレープのかけ方1つとっても先生によってまったく違います。けれどそれは教科書で学ぶことでなく、その時にその先生がやっているテクニックとしての意味合いを教えていただいて学ぶことが多いです。まずは取り入れて、自分の考えたやり方につなげていければいいかなと思います。

山本 指導医の先生も若い人に意見されて、自分がやってきたことを否定されるように感じる方も中にはおられると思います。けれども指導医の先生にとっても、新しい知識を取り入れたり、自分の臨床経験をポリッシュアップしたりするとてもよい機会なので、若い先生の話に誠実に耳を傾けて、お互いを高め合っていっていただければいいなと思います。

出し惜しみせず教える。積極的に聞く。

土屋 皆さん、自分のスタイルというのが絶対にありますね。医療にはこれが100%正しいというものはありません。ほとんどない。最良の結果が出るならば、道筋はどんなものでもいいわけですから。若い先生たちはいろいろな先生と接して、いろいろなものをみる。その中から自分のスタイルをみつけて診療に活かせばいいのではないのでしょうか。

患者さんが何を一番望んでいるかといえば、現在ある最新・最良の治療をして、そしていい結果を出してほしいということです。だからベテランも、若い先生も、全力を尽くして治療にあたるわ

けですが、コミュニケーションをとって、お互いに最良のものを求めていかないと、それは果たせないと思いますね。

スペシャリストは、自分の知識・技術を出し惜しみしないで教える。そして若い人は遠慮なく積極的に質問する。そうやってコミュニケーションを図りながら、一番いいものを求めていく姿勢が大事だと思います。

読者がまずは自分で勉強して、次にスペシャリストたちは何を考え、何を自分たちに望んでいるのかを理解しようとしたら、企画の目的が達成できたことになります。今回の特集を役立てていただけたら嬉しいです。

(収録：2023年2月、金沢大学/進行：本誌編集室)